

## 研究者のジョーシキ — 心理士のキャリアデザインに向けて —

高石 浩一

博士後期課程の学生たちに博士論文執筆の指導をしていて気づいたことがある。それは、彼らにいわゆる研究者としてのジョーシキが欠けている、ということである。これは、学会で先輩に挨拶ができないとか、論文の書き方を知らないとか、そういった表面的なことではない(もちろんそれらは大切なことではあるが…)。そもそも「研究者」とは、どういった人を指すのか、プロの「研究者」として生きていくとはどういうことなのか、という認識である。そうした基盤の上に立って、「卒業論文」「修士論文」を含めた論文執筆を位置づけないと、なかなか「博士論文」までたどり着けない。たどり着けても、「研究者として生きる」ことにつながらない、と感じたからである。

もちろん、このジョーシキは筆者の考える「常識」であって、普遍性は乏しいかも知れないし、思い込みや間違いを含んでいるかも知れない。また、あらゆる意味で時代遅れだとも思われるかも知れない。その意味で、今回は「ジョーシキ」とふざけたタイトルにしているが、少なくとも「研究者」の業界に長年身を置くものとして、有言無言に身につけた「研究者」とは何か、について考えていきたいと思う。

### <プロの研究者とは>

博士後期課程において、筆者が講義で教科書として用いている『博士号のとり方』(2018)では、「博士号取得とは当該分野の『プロの研

究者』となること」であり、「プロの研究者」の条件として以下の項目を挙げている。

- 同僚に意見を求められる。
- 専門分野で何が起きているかを把握し、その価値を評価できる。
- 研究に貢献する箇所を見つける嗅覚がある。
- 職業倫理を理解し、許される範囲内で研究をする。
- 現在使われている研究手法をマスターし、さらに手法の限界について知っている。
- 専門分野の検証、結果を効果的に説明できる。
- 国際的に通用する同僚が地球規模に存在し、世界中の研究者コミュニティの間で何が発見され、議論され、出版されているかを把握している。

ここで述べられている内容は、いささか抽象的過ぎるが、筆者なりに要約すれば、「日々更新される専門分野における研究状況を常に把握し、自らが専門とする研究領域において適切な研究手法で研究を積み重ね、論文を書き続けていること」といえるかも知れない。

ただし、これではあまりに理念的であり、具体的にどういった内容を含んだものなのか、どのように評価されるのか、とりわけ博士号を取得しようとする学生たちにとっては、雲をつかむような目標であり、実現可能性や自らの到達度を自己評価できるような基準ではないので、あまり役には立たないかも知れない。それでも、

まずはこうした理念を念頭に置きながら、では具体的にどういったことを目指せばよいのかを考えていく、いわば里程標のようなものとしてこの定義を捉えておきたい。その上で、以下に筆者が考える、プロの「研究者」としての具体的なメルクマルを縷々述べていきたい。

## 1. 年に一本は論文を書く。

学士として大学を卒業する際には卒業論文を書く。これは拙論（2009）でも述べたが、学術論文の形式で自らの考え、主張をまとめる練習のようなものであり、その意味で基本的に重要なのは（学術論文という）形式である。つまり、内容的にオリジナリティがあるか、新奇性や今後の研究への貢献が期待されるか、といった本来の学術論文に求められるような評価基準は一般に卒業論文では必ずしも求められず、むしろ学術的に正しい方法論に基づいているか、学術論文として問題、目的、方法、結果、考察、文献という論文の基本的形式に準拠しているか（文学系の論文であれば、「序論」「本論」「結論」であろう）、論理的に書けているか、文献の引用の仕方は適切であるか、図表などの表記が正式の論文作法に則っているか、さらに当然ながら盗用や剽窃といった研究倫理に反する書き方がなされていないか、といった諸点が吟味される。

これをスタート地点として、大学院生は博士前期課程において修士論文を執筆し、博士後期課程において博士論文に挑戦することになる。もう少し詳細に述べれば、卒業論文において一定の水準に達した論文を書いて初めて学生は博士前期課程の院生として大学院に迎え入れられ、当該の論文を学会において発表して初めてM1の院生は「研究者」としてデビューすることになる。その後、博士前期課程の二年間の間に、卒業論文の二倍に相当する分量の修士論文

を書く。そこでは研究者としての資質、すなわちオリジナリティやテーマの新奇性、研究内容の今後の研究の発展可能性などが評価基準に加えられ、併せて学術論文としての完成度の高さが問われることになる。

ここから博士後期課程の大学院生として進学が認められると、まず修士論文を学会発表し、(分量的に)二本程度の学術論文として学会誌に投稿するのがお作法である。その上で博士後期課程在籍中に新たにもう一本以上、学術論文を執筆することが期待される。要するに毎年一本は最低限、学会発表、論文執筆のサイクルをこなしていくことが、研究者としてのあるべき姿として期待されている、ということなのである。

幸運にも卒業論文からテーマが一貫している場合、D3すなわち博士後期課程3年修了段階で同じテーマを発展させた論文が、卒業論文、修士論文（卒業論文2本分）、博士後期課程において加えた一本とそろっておれば、課程博士への道はぐっと近づくことになる。博士前後期課程全体において、合計で卒論を加えて6本に及ぶ論文を執筆していると、いわば博士論文は完成したも同然である。少なくとも課程博士のたてつけは、そうした構造になっている、と考えるべきであろう。

その後は、毎年上記のサイクル、すなわち学会発表と論文執筆を1サイクル以上続けていくことが研究者としての矜持ということになる。もちろん研究領域によって、研究テーマによって、あるいは留学や就職、出産といったライフサイクル上の出来事によって、一時的な中断や留保はありうるが、おおむね年に一本以上の学術論文の執筆は、研究者としての最低限の条件と言えるのではないだろうか。

## 2. 学会活動を行う。

上記と連動しているのが、学会活動である。基本的にどこかの学会に所属し、学会員になることは研究者としてのアイデンティティとでも言えるものであり、自らの研究領域の学会に所属して定期的に学会発表を行うことが研究者の矜持である。大学や研究所に所属する研究者の多くは複数の研究テーマをもっており、したがって複数の学会に所属していることが多いが、博士前期、後期課程の院生レベルでは、とりあえず上記の「学会発表と研究論文」のサイクルを受け入れてくれそうな研究テーマに合致した学会を見つけ出し、当該学会に所属するゼミ担当教員などに推薦書を貰って入会許可を申請する必要がある（学会によっては必ずしも推薦者を必要としない場合もあるし、関連機関に所属していることで機関会員として自動的に認められる場合もある）。学士レベルで（つまり大学卒業レベルで）学会員の申請をしても通らないことが多いが、大学院に所属しておればまず認可されないことはない。ただし、学会発表は採択制を取っている場合が多いので、研究テーマがそぐわないとなかなか発表の機会が得られず、単に学会費を払っているだけ、ということにもなりかねないので、所属学会選びはそれなりによく考える必要がある。当然ながら、学会誌への投稿は学会員でないと認められないので、まずは自らの研究テーマに沿った適切な所属学会を探して学会員になる必要がある。

臨床心理士にしろ公認心理師にしろ、基本的に博士前期課程修了をもって受験資格が得られるので、大学院における教育は高度専門職の職業訓練という性格が強い。ただ当初の理念によれば、臨床心理士は「研究能力を備えた心理臨床実践家」を目指しており、一方の公認心理師は「チームで活動できる心理学的援助の実践者」を目標に掲げている<sup>1)</sup>ので、アカデミズムに

対する要請は前者の方が強い。

研究者としてのスタート時点での学会活動は、こうした博士論文作成に向けての学会発表が主となるが、その後の学会活動は単に学会発表にとどまらない。学会は定期的な大会や総会の開催以外にも学会誌の査読、編集、出版、研修会の開催、研究助成の募集、選定、倫理審査、資格制度の創設や維持など、枚挙にいとまがないほど多種多様な活動を常時行っている。それらの活動の多くがアカデミック・ボランティアの名のもとに、ほとんど無給である学会員の活動によって支えられている。こうした活動を支える一員となること、つまり後進の育成と当該領域の研究発展に向けて活動することが、シニアの研究者として求められるようになってくる。院生時代は学会の準備や事務運営の手伝いをすること、やがて自らの研究領域に関連する投稿論文の査読者となること、さらに上記のような学会諸活動の委員となって貢献すること、が比較的表に現れにくい研究者の行う学会活動である。

さらに数万人の学会員を抱える大きな学会になると、委員の選挙自体が大きなイベントになりうるし、そこで選ばれる委員、委員同士の互選で選ばれる委員長、さらに学会長などは国の学術会議のメンバーとして推挙されたりして、重要な名誉職となる。国際学会の委員や長ともなると、インターナショナルに認められた研究業績をもとに推挙されることが多いので、その名誉たるやなまかななものではない。

大会委員長として大会や総会を引き受けると叙勲の対象になる、という話も聞いたことがある。学会開催はなかなか大変なので、引き受け手がない時の都市伝説とも考えられるが、こういったものは目指して得られるものではなく、様々なところで推挙されて選ばれる性質のものであるので、それを目標にすることは研究者として

は本末転倒である。

いずれにしても、こうした学会活動に何らかの形で関わっていることは、後述する「後進を育てる」ことに直結した営みであり、研究者を研究者たらしめている重要な要素と言える。

### 3. 留学する。

多くの研究者にとって留学（在外研究）は命である。研究テーマがどのようなものであったとしても、海外の研究機関に一定期間所属し、そこで教育を受けたり研究を行うことは、その後の研究活動に大きな影響を及ぼす。留学先は基本的に国内外を問わないが、国外の方が圧倒的に得られる刺激も情報量も多いので、国内研究（内地留学）はこの際「留学」とは呼ばないことにしよう。なぜなら、留学とは異国において異なる価値観と出会い、自らの研究テーマを深めることのみならず、学問の拠って立つ基盤を相対化することにこそ、その主たる目的があるからである。地方に出向いたり国内の大学に内地留学しても、たいした価値観の変動や揺らぎは起こらない。むしろ一週間でも一月でも、海外に出るだけで価値観の相対化のチャンスは爆発的に増加する。

留学はいつ行くか？高校時代に AFS などの国際教育交流プログラムに乗った交換留学生の道は、親に資産や文化的土壌があれば、認めてもらえる合法的な家出である。それより以前に10代の小中学生の時期に親の仕事で、一家で移住したといったような留学体験をすると、人格形成期だけにその影響は深く大きく人格に刻み込まれ、生涯にわたって本人の資質となる。若ければ若いほど、そこでの体験は血肉となって身体に取り込まれ、オランダの日本人だの、イギリスのアメリカ人だのイタリアのカナダ人といったアイデンティティを培うことができる。より若い段階で家族移住すると、(例えば

幼少期に難民として、ボートピープルで国境を越えてきたベトナム人は、親より先に日本文化にとけ込む指南役として親たち以上に移住地の文化風土に過剰適応する傾向があったりもする)もともとの文化の上に別の文化がしみ込んで、異文化葛藤を内在化した存在、多様性を内包した人格形成が行われるように思う。その意味で、いつ行くか、どこへ行くか、どれだけいるかは極めて重要である。20代までに留学経験があれば、それに越したことはない。現地で人脈ができ、その後、数年単位で交流を深めることができる貴重な現地の友人を作ることができるからである。

大学に進んでから後の、学部時代の留学は受け入れ先も現地の語学学校で、数週間のプログラムを日本語母国語の友人たちと英会話の練習をするという、研究とは結び付かない自由な長期旅行の様相を呈する場合が多い。それもそれでいい。予想外の歓待と予想外の冷遇にさらされ、多かれ少なかれ若い時に培われた海外での人間関係は必ずや、後の人生に組み込まれることになるだろう。

しかし何よりも重要なのは、研究者としての留学体験である。院生から若手研究者の20代～30代前半の留学では、受け入れ先の研究機関に若手スタッフや学生、研究生として受け入れてもらうことになる。そこでは同世代の仲間たちと出会い、様々な知的刺激を受け、純粋に研究の楽しさを知ることができるようになる。この時代に方向づけられた研究テーマは、それこそ生涯にわたって研究者を動機づけることになるだろう。

ただし、一方でこの時期に海外に出ることは、いまだ研究者としても未熟であるが故の不幸な影響を及ぼすリスクもある。(語学力を含めた)自らの力の足りなさ、積極的に仲間や教員と関わる姿勢を持てなかったせいで、留学体験その

ものがトラウマになってしまうことも少なくないからである。その意味で人によって最初の留学体験は、天国か地獄の両極に分かれるように思う。天国体験をした人は、その体験を繰り返し味わおうと、短期にせよ在外研究を心待ちにするし、地獄体験をした人は二度と在外研究を望まず、もっぱら国内にとどまってこじんまりとした研究テーマを肅々と追求することになる。こうした人の中には、管理職に就いて後進の若手研究者の留学を阻んだり、留学無用説を唱えたりする厄介な人になったりするから始末が悪い。

筆者のように30代後半になって異文化を体験すると、自らの文化的土壌から傍観者的に異文化を眺めることになる。自らの立ち位置が明確になっている分、軸がぶれることは少ないが、差異や相違に目が行って、客観的にそれらを分析しようとすることになる。無批判に受け入れてきたジョーシキや価値観が、異文化の下では無価値とされたり軽重が変わったりするばかりではなく、まったく別のもの、別のことが重要であるとされていることに気づくことも多いが、基本的に自身の価値観が大きく崩れることはないし、その生成に異文化が関与する比率はさほど大きくない。ただし、研究者としてもある程度の知見をもとに留学先に赴くことができるし、先方もそれ相応の扱いをしてくれるので、トラウマ体験になることは比較的少ないように思う。

昨今、FD (Faculty Development) 論議が喧しいが、5年もしくは6年に一度、1年間のサバティカルを利用して海外留学(伝統的に「在外研究」と呼ぶ)し、その成果をもって学生に還元することがFDとして位置づけられていたことは意外に知られていない。少なくとも、欧米ではサバティカルの成果として、(後述する)モノグラフを作成することが義務化されている

のは、そうした貢献を期待するからである。学会を含めて海外に一週間行けば一年分(論文一本分)、一か月行けば3年分、一年行けば5年分(あるいはモノグラフ一冊分)は知的刺激を受けて、研究者として生産的でいられることは筆者の実感としても首肯できることを強調しておきたい。

#### 4. モノグラフを書く。

我々は若手の研究者として活動し始めたころに、よく恩師に「教科書ばかり書かんと、モノグラフを書いて自らの考えを世に問わないかん」と言われたものである。編集者と関係ができると分かるが、出版社にとって毎年一定の売り上げが期待できる教科書は、営業的に望ましい出版物である。特に受講生の多い大講義であれば、毎年何百冊単位で売り上げが上がる可能性も大きいので、「授業の教科書として使う」と言うのと、多少高価な専門書でも出版を引き受けてもらえる場合が多い。したがって、研究者のジョーシキとしては、一般に教科書は研究業績としては一段低く見られる。

その意味で自らの研究テーマのもとに書下ろした単著、いわゆるモノグラフの出版は研究者にとって一つの夢であり、矜持でもある。その最初の成果が多くの場合、博士論文であると言えば、モノグラフの重要性が理解できるのではないだろうか。一つの研究テーマのもとに学会発表から研究論文のサイクルを数年続けていると、自ずと数本分の研究論文が蓄積される。通常、単著として出版社が引き受けてくれる本は、原稿用紙で200枚から400枚程度、論文本数で5~7本程度である。ただ専門書は、上記のように出版社にとって営業的には必ずしも望ましい出版物ではないので、ある程度以上の知名度や評判、あるいは売れるという確約や見込みがないと、モノグラフとしての出版にこぎつける

のはなかなか大変である<sup>2)</sup>。

モノグラフに代わって、あるいはその前段階として、研究者がしばしば取り組むのは翻訳書の出版である。冒頭に掲げた「プロの研究者」の条件に「国際的に通用する同僚が地球規模に存在し、世界中の研究者コミュニティの間で何が発見され、議論され、出版されているかを把握している」ことが掲げられているが、自らの研究テーマを追及していくうちに、多くの場合、同じような研究テーマを扱っている海外の仲間や同僚、先輩と呼べるような研究者の存在を知るようになるものである。そうしてその研究者の論文や著書を読んでいるうちに、その内容を是非我が国にも紹介したい、そうしたことを通じて同好の士を募りたい、という気持ちが募ってくるものである。

筆者の場合、大学院生時代に興味を持って読んでいたのは Eugene T. Gendlin の *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective (Studies in Phenomenology and Existential Philosophy)* であり、Heinz Kohut の *The Restoration of the Self* であった。その他にフランス語の勉強をかねて読んでいたのは Eugène Minkowski の *Le temps vécu* であった。このうち、当時の先輩や同級生と一緒に読んでいた Kohut の本については、著作権を取得しての出版をもくろんだが、ある程度読み進めてから出版社に問い合わせると、既に名古屋大学のグループに先を越されていることが判明して断念した<sup>3)</sup>。そんな時に出会ったのがスイスのユング派分析家 Mario Jacoby の『分析の人間関係』（1985：創元社）の訳書であり、その冒頭「日本の読者へ」の中で「ちょうど『自己愛と個性化—C.G. ユングと H. コファートにおける自己心理学』の原稿を仕上げたとこ

ろです」という文章であった。これは当時筆者が最も興味を持っていたテーマであり、まだ出版されて間もない本ということで、当該の文献が英語なのかドイツ語なのかも確認しないままに、出版社に著作権取得をお願いした<sup>4)</sup>。実は原稿がドイツ語であり、どうしても読みたかった筆者は第3外国語としてのドイツ語学習と並行して翻訳作業を進めたため、英語版との比較をしつつの翻訳作業は遅々として進まなかった。結果的に翻訳書出版にこぎつけるまでに10年以上を要し、出版社には甚だご迷惑をおかけしてしまっただが、この翻訳書を手土産に、著者の Mario Jacoby に教育分析を受けにチューリッヒのユング研究所に赴いた<sup>5)</sup>。ことは、筆者にとって何物にも代えがたい貴重な体験となった。その意味で、モノグラフや翻訳書を手掛けることは、研究者にとって重要なワンステップであると言えるように思う。

## 5. 後進を育てる。

後進を育てることは、一見研究者であることの必要条件とは言えないように思えるかも知れない。市井の孤高の研究者、あるいは研究所に所属してコツコツと自らの研究に勤しむ者もまた、研究者であることに間違いはないからである。しかしながら、これまで述べてきたように、学会に所属し、あるいは国内外の研究者と情報共有し、学会誌やモノグラフなどを通じて自らの研究成果を世に問うのが研究者としての営みであるならば、後進の育成は自らの研究成果の発展にとって不可欠であり、遅かれ早かれそうしたことが視野に入ってくるものである。

すべからく、次世代の育成は自らの仕事に誇りを持っている限り、やがては生じてくる欲求である。研究者なら研究者を、職員なら職員を、政治家なら政治家を、酒屋なら酒屋を、料理人なら料理人を…自らの仕事に誇りを持っている

人ならば、次世代に自らの仕事を継がせたいと思うものである。もっとも、時代の変遷を肌身で感じ、もはや時代遅れの仕事になりつつあることを感得しているからこそ、現実的な判断に基づいて自ら弟子を取らない人もいるかも知れない。しかし、ひそかに後進の育成を夢見る人は少なくない。

筆者が後進の育成を始めて意識したのは、SV（スーパービジョン）を引き受けて欲しいという依頼があった30代半ばである。当時はまだまだ自分の心理臨床のスタイルすら十分に確立しているとは言い難い年代で、依頼を受けて甚だ悩んだものである。結果的に共に歩む（成長しようとする）形でなら引き受けられるかもしれない、と後進育成の端緒を開いた。以降、上記のように留学を挟んで、自らが体験したSV、教育分析をベースにして、40代はもっぱら後進の育成に励むようになったが、まだまだ当時は「後についてこい」だの「背中を見て学べ」といった、切磋琢磨する同僚といった扱いであった。実際に後進の教育を正面から全身で引き受けるようになったのは、自らの能力の限界を感じ始め、同時にはっきりと共通体験を持ってなくなってきたと感じるようになった、55歳を過ぎてからではないかと思う。時代の変化に伴って、（自らを含めて）淘汰されるべきものはもちろん視野に入ってきたし、他方で時代を超えて残すべきものが明確になってきたのもこの頃である。

この時代はちょうど大学院生を指導し、博士論文を書かせる作業に向かわせる時期でもある。若い研究者は自らの研究テーマについては第1人者を目指すべきであり、そこで指導教官と院生の関係は逆転する。院生が新たな研究領域における第1人者としてその研究成果を説明し、教員はあくまで当該研究においては教えを乞う形で、研究者としての観点から当該研究の

位置づけ、貢献度、発展可能性などを質問する…そこで明快な答えが得られるか否かが評価の分かれ目になる。昨今の博士論文は、あくまで一人前の研究者としてのスタートラインに立つ資格論文である。それは今後の研究の方向性を決めるものであるし、少なくとも専門領域において師を超える主張や見識が問われることになる。専門外の者に分かりやすく説明できて初めて、一人前の専門家である。最初、それは後輩の院生たちであり、やがて教員になり、最終的に博士論文の査読審査員になる。そして、出版まで視野に入れるなら、それを読む一般読者への説明責任が生じる。したがって前述のように、研究者にとって最初のモノグラフは、往々にして博士論文となる。

## 6. 改めて「研究者」とは

最後に筆者にとって、これだけは決して譲れないと思われる一点、「研究者」の  $a$  であり  $\omega$  ともいえる事柄を強調しておきたい。それは文系の「研究者」の博士号が Ph.D. で称されることと密接に関連している。周知のとおり Ph.D. は Doctor of philosophy の意であり、もともと神学、法学、医学以外のリベラル・アーツが哲学 philosophy 由来であることから来ている。この philosophy はさらに語源的に遡ると、「愛」を意味する「フィロス」( $\phi\lambda\lambda o\varsigma$ ) と、「知」を意味する「ソフィア」( $\sigma\phi\iota\alpha$ ) の合成語とされている。つまり「知を愛する」意であり、さらに言えば金でも権力でも地位でもなく、「知」すなわち「真理」を「愛する」ことを意味する。ソクラテスが金をとって弁論術（詭弁）を教えるソフィストと自らを区別するためにこの語を創作したという背景を知れば、そこに込められた思いは一層明確である。「愛する」とは「信じて仕える」ことであり「そうすることに喜びを見出す」ことだからである。

つまるところ、「知」＝「真理」を信じ、その探及に「喜びを見出す」ことがなければ、「研究者」とは言えないのではないかと筆者は考えている。

昨今、教員業績評価がアカデミズムとは縁の薄い民間業者に委託されて行われることが増えてきた。出勤日数や大学の運営方針への忠誠心がそのまま評価の対象になるのはご愛敬だが、著書や論文などの形で目に見える業績を残せないのは、研究者本人の怠慢もあるが、それをさせない、できる時間を与えない大学の組織運営の問題でもある。そもそも多様な領域に独自の興味関心を抱き、「知」に「喜びを見出す」ことを旨とするのが研究者である。それをさせないで大学の管理運営、組織構築、果ては営業活動にまで駆り出すことで教職員の専門性を曖昧にしていこうとする昨今の動向は、研究や研究者への冒涇以外の何物でもないと思う。

米国の Ph.D. は修士論文レベルであるとか、それをモデルにしている日本の博士号も昨今はレベルが低いと揶揄する声も仄聞する。確かに筆者が大学院に在籍していたころと比べると、博士後期課程在籍中に博士論文を書き上げよという圧力は強まり、その分学位の取得は容易になった印象は否めない。アカデミズムとは別の領域で実践経験を積んできた者を「実務家教員」として雇用する大学も増えたとし、その業績評価は勢い実務中心にならざるを得ない<sup>6)</sup>。さらに上述のように博士号の学位取得は、「研究者」としてのとは口に立ったものと見なされるようになった。それでもなお、それだからこそ余計に、単に学位を取得した者ということではなく、「知の探究に喜びを見出す者」としての「研究者」の原点を、改めて高唱したいと思う。

## 注

1) 臨床心理士資格認定協会の HP では臨床心理士

の専門業務として①臨床心理査定②臨床心理面接③臨床心理的地域援助と共に④として①～③に関する調査・研究を挙げており、アカデミックな研究能力を重視している。ただし、2003年度より高度専門職業人としての臨床心理士を養成する専門職大学院が認可されたが、そこでは修士論文の提出は必ずしも求められず、若干④の軽視が認められると言えなくもない。

一方、公認心理師の職責として対応する部分の表記については、①要心理支援者の心理アセスメント（心理状態の観察とその結果の分析）②要心理支援者への支援（相談に応じ、助言、指導、その他の援助を行う）③要心理支援者の関係者への援助（相談、助言、指導、その他の援助）④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供（国民全体に対して）となっており、臨床心理士における④の調査・研究は明記されていない。さらに多職種連携、チーム医療、チーム学校といった「連携」の高唱も特徴的である。

- 2) そのため、研究書として出版するには、出版助成という制度が国（文部科学省）や研究機関（大学）に設けられている。
- 3) この本はコフォート4部作の一部として、1995年に『自己の修復』（みすず書房）として上梓された。
- 4) 通常、草稿が仕上がっている段階で出版社に持ち込むのが当たり前であるが、当時は心理学が流行していて、翻訳の口約束でも著作権取得が可能であった。ただし、いったん著作権を取得すると出版社はエージェンシーに年間数十万円単位で著作権維持料（要するに他社に著作権を委譲しないという約束料）を支払わねばならず、大急ぎで出版にこぎつけなければ出版社に迷惑がかかる…こうしたオトナの事情を知ったのは、大学院修了後のことであった。
- 5) この時、同時に筆者にとって初のモノグラフ『母を支える娘たち—ナルシズムとマゾヒズムの対象支配—』（日本評論社；1997）を上梓できたのは、まさにシンクロシティとも言える運命的な出来事のおかげである。この詳細については高石（2011）で述べられている。
- 6) 筆者自身、32歳から38歳までの6年間（5年以上）、私立女子大学の専任カウンセラー（身分は専任講師から助教授）として勤務しており、学生相談の実務はもちろん、学生相談室予算の立

案から企画、運営の一切を任されていたので、文部科学省の基準に従えば「実務家教員」であろう。

#### <文献>

- ・ E.M. フィリップス, D.S. ピュー (2018) 角谷 快彦『博士号のとり方』角谷快彦 (訳) 名古屋大学出版会—学生と指導教員のための実践ハンドブック
- ・ マリオ・ヤコービ (1985)『分析的人間関係』氏原寛・丹下庄一・岩堂美智子・松島恭子 (訳) 創元社
- ・ H. コフォート (1995)『自己の修復』本城秀次・笠原 嘉 (監訳) みすず書房
- ・ 高石浩一 (2009)「臨床心理士の就活論—この業界で生き延びていくために—」『京都文教大学心理臨床センター紀要』第 11 号 pp.49-56
- ・ 高石浩一 (1997)『母を支える娘たち—ナルシズムとマゾヒズムの対象支配』日本評論社
- ・ 高石浩一 (2011)「ケータイ・ネット時代の臨床心理学 改め 河合隼雄が本当に言いたかったこと」東山紘久他編『四天王寺カウンセリング講座 10』創元社 pp.77-103

#### <資料>

日本臨床心理士資格認定協会 HP

<http://fjcbep.or.jp/> (2021.3.28 検索)

公認心理師現任者講習会テキスト 2019 年度版 (2018)

金剛出版

